



出会いの序章

リトルウィング内で小規模に勃発した冷戦を終えた頃。

惑星モトゥブにある1つの研究施設で、サイレンが鳴り響いていた。
そのサイレンと同時に、数人分の廊下を駆ける足音が無数に聞こえた。

「探せ！！ 探して見つけしだいすぐに捕獲しろ！！」

白衣を身にまとった研究員達が慌しく走り出し、とある存在を探していた。

『・・・・・・・・』

そんな研究施設内に響く足音を軽く聞き流しつつ、静かに出口を求める存在がいた。
小柄の体格だが手は無く、両足と大きな尻尾だけを必死に動かして走る、原生生物。
原生生物学上ではその生物の固体名は『ナヴァル』と呼ばれていた。
だが彼は普通のナヴァル達とは違い、体の色は独特な黄色だった。
その体に秘めた属性は雷。 本来その属性を持つナヴァルはいないとされ、そのため実験生物としてここで捕らえられ、毎日を過ごしていた。
体に無数の傷を開けられ、体に痛みを伴う毎日。 自分の体内や皮膚を好き勝手弄り回す忌まわしい存在達の怪しい目の色。
そんな辛い毎日から逃げ出そうとしたのは、捕らえられ、同じような毎日を共に過ごす他の原生生物達の手助けのおかげだった。

[逃げろ！ お前だけは！]

[体格が小さく、ここから出られるのは君だけだ。]

[早く、君はこの施設内で一番の実験材料なの。 早く逃げて！！]

そういい、今まで手助けしてくれた他の原生生物達。
だが今はその存在達はそばにはおらず、追っ手の研究員達と退治していた。
相手は武器を持っているため勝ち目は低いが、時間稼ぎといわんばかりに果敢に戦っていた。
体格の大きい原生生物は自ら研究員達の前へと立ちはだかり、持ち前の怪力で研究員達をなぎ払った事。
途中施設内の射撃マシンリーに攻撃されたものの、他の原生生物達が守ってくれたおかげで軽症

ですんだ事。

その全ての後ろ姿を目に焼きつけ、ナヴァルは研究施設の出口に向かって駆け出した。

『皆．．． ありがとう．．．』

あるのかは解らない心の中で、ナヴァルはそう言うと、痛む体を引っ張りつつ外の世界に出て行った。

苦痛が無いかは解らないが、平和と呼べる外気の世界を求めて．．．

「主ー」

モトゥブ内でそんな生死を分ける戦いが行われている中

クラッド6内にあるリトルウィングのマイルームの一室で、フィルスターは主であるギラムに声をかけた。

「ん。 どうしたフィル。」

「ベルから依頼の協力願いが来てるぜ。 モトゥブの運搬手伝いと。」

部屋の一室にあるベットに腰掛け、武器を磨いてた手を休め、ギラムは質問を聞いた。

その内容は任務の依頼であり、戦いの好まないアリンにとっては簡単だが、力のいる仕事だった。

「さすがにアリンとベルだけじゃ無理そうだからって言って来たんだ。 報酬は元の半分だってさ。」

「そんなにいいのか？ アリンが受けた依頼だろ。」

フィルスターの言った事に対して、ギラムは驚きつつ聞き返した。

パーティを組んで依頼をする事が比較的多いリトルウィングでは、大元の報酬を分配してそれぞれの資金として割り当てられることが多い。

そのため上からの命令や口封じの賄賂によってはこの分配も左右され、多めに出して別の利益を得る人々も少なくは無かった。

ギラムもその内の1人であり、主にエミリアに関するクラウチへの『口止め料』として何割か上乘せして行動する事も少なくは無かった。

しかし今回は自分が受託した依頼ではない事に踏まえ、話を振ってきた側にしては多くないかと彼は気にしていた。

彼女がそんな事を考えて分配をするとは思えないのだが、慣れていなくて多めに設定してしまったのなら相談をするのもありだと思った様だ。

「ああ。 キャストはそこまで金は使わないからな、そういう点では出費は少ないんだよ。 きっと。」

「へえー」

改めて知った事に対して、ギラムはそう言うしかなかった。

「ま、あの後だからな。 もっと仲良くなりたいんじゃないか？」

そんな彼を見ていると、社内で勃発したあの出来事を思い出してフィルスターは苦笑しだした。外野の様で外野でなかった前回のギラムは、あれほどにまで面倒な事は二度は御免だろう。軽くパートナーに小馬鹿にされる所は、いつもの事である。

「まあそれは構わないが・・・ 笑い事じゃないからな？」

「へいへーい。」

ギラムも同様に思い出し、少々浮かない顔をしつつフィルスターに言った。

「依頼はこの後だってさ。 手入れ終わったら行こうぜ。」

「ああ、了解。」

フィルスターにそう言われ、ギラムは再び手入れを開始した。

同様にフィルスターも武器を持ち出し、手入れを開始した。

その後、手入れを終えたギラム達はアリンとウィンドベルと合流し、依頼があったモトゥブへと向かって行った。

「ふう。 結構荷物がたくさんあるんですね。」

荷物をマイシップで運び、小休憩を取っているギラム達一行。

モトゥブ内にある草原エリアで一休みをしており、4人は外でお茶をしていた。

「まあほとんどが武器の材料みたいだけだな。 テノラ・ワークス社からの依頼だし。」

ウィンドベルから先ほど借りた依頼書を見て、フィルスターはそう言った。

今回の依頼先は、武器製造を行っている企業『テノラ・ワークス』からの物だ。

武器の生産を行う上での材料を仕入れ、その材料の運搬を傭兵達に依頼として回したのだ。

彼等もその依頼を引き受けた者達であり、依頼報酬は企業ならではの安定した額である。

「確かギラムさんがお持ちの武器も、テノラ製品がありませんでしたか？」

ふとフィルスターが言った事に対してそう思い、アリンはギラムに問いかけた。

「ああ。 威力が結構あるし、使い勝手がいいからな。 威力向上に特化した武器だと思うぜ。」

「そうでしたか。」

ギラムからの答えを聞いて、アリンは納得した。

武器生産を行っている企業は数多くあるが、中でもトップブランドとして名高い企業は数少ない。

表に出ている企業は『G R M(ガルム)』、『ヨウメイ』、『テノラ』の三社でありそれぞれが得意とする分野も違っていた。

安定した性能を持つG R M社に対し、フォトンのバランスを考えデザイン性にも富んでいるヨウメイ。

変わってテノラは威力重視の構造となっており、それぞれの強みを維持した武器となっている。

ギラムもテノラ社の武器には世話になっており、威力が高く力のバランスが込めやすいと評価していた。

「じゃ、そろそろ行こうぜ。 遅くなると額下がっちまいそうだし。」

休憩を終えた後、フィルスターはそういう行動を促した。

3人はその言葉に同意し、片づけを開始した。

『シャー・・・』

「？」

折りたたみ式のイスを片付けていたウィンドベルは、ふと何かの鳴き声を耳にした。辺りを見渡したが、声を発した人物らしき人影は無かった。

「ベルちゃん、どうかしましたか？」

そんな彼の様子を見て、アリンはウィンドベルの元へと行った。

「いえ、何か鳴き声が聞こえた気がしたんですけど・・・ 気のせいだったかな。」
「鳴き声？」

ウィンドベルの言った事に対してアリンはそう言うと、サーチ機能を起動しつつ辺りを見渡した。

特にメカ等は無いものの、別の反応があった。

「あちらに、何かいますね。」

反応があった方角を見つつ、アリンはそう言った。
そのやり取りを見て、ギラムとフィルスターもその場にやってきた。

「どうした？」
「あちらの草むらに、原生生物がいます。」

ギラムからの問いかけに対して、アリンはそう言った。
その言葉を聞き、その場にいた4人は武器を構えた。

「草むらに隠れるほどだから、小型かな・・・」

ウィンドベルはロッドを構えつつ、慎重に草むらへと近づいた。

「だろうな。 フィル、援護を頼む。」
「はいはい。」

フィルスターにそう言うと、ギラムはツインダガーを片手に草むらの中へと入っていった。
するとそこには、案の定原生生物が群がっていた。

「ナヴァルか。」

「たくさんいるな・・・ めんどくせー。」

ギラムの後ろにいたフィルスターは、裸眼で相手を見てそう呟きつつ、渋々ライフルを構えた。それを見たナヴァル達は、こちらを見て威嚇をしてきた。

〈シャーッ！！〉

「チッ、めんどくせえな。 一気にやっちまうか？」

「待て。 フィル。」

攻撃を開始しようとしたフィルスターを、ギラムは静止した。

「何だ主。」

「様子を変だ。 アレを見ろ。」

やる気を削がれたフィルスターがそう言うと、ギラムはナヴァルの群れの奥を指差した。そこには近くにいるナヴァル達とは色が違い、少々弱っている黄色いナヴァルの姿があった。足と尻尾には何かで焼かれた後があり、傷を負っている様子だった。

「怪我、してますね・・・」

アリンもギラムのいる場所へと近づき、そのナヴァルの様子を見つつ言った。

「きっと何処かでやられたんだな。 ちゃんと駆除しないって事は、俺らと同種の仕業じゃねえな。」

「可哀想に・・・」

そこにいるナヴァルの様子を見て、アリンはそう呟くと、ギラムは武器をしまった。

「どうする？ 俺らが片付けるか？」

「いや、無闇に駆除するのはいけない事だ。 ましてや周りはコイツを庇ってる。 手当てしねえとな。」

ギラムはそう言うと、無装備の状態でナヴァルの元へと向かって行った。

もちろんその行動を見て、ナヴァルが大人しくしているはずもなく、再び威嚇をしてきた。

〈シャーッ！！〉

両足を地面で引っかいており、ナヴァル達は攻撃する状態に移ろうとしていた。

「主！ 正気か！？」

その様子を見て、フィルスターは叫んだ。

「無装備じゃ怪我しちゃいます！」

「こいつらも無装備だ。 戦うつつもりも無いんだから、武器はいらねえだろ。」

ウィンドベルの言った事に対して、ギラムはそう言いつつ前へと進んで行った。
すると、案の定ナヴァル達が襲い出し、ギラムに攻撃を開始した。

「主ッ！」

それを見たフィルスターは、とっさにライフルに手をかけ、撃とうとした。

「やめろフィル！」

その行動を制止するかのようになり、ギラムは叫んだ。

すると、ナヴァル達はそのまま攻撃をしだし、牙でギラムに傷を負わせ始めた。

「主！！ 死ぬ気か！」

「黙ってそこにいろ。 俺なら平気だ。」

怪我を負ったにも関わらず、ギラムはそう言い、怪我をしたナヴァルの元に膝をついた。

すると、後方から先ほどのナヴァル達が駆け寄り、背中にタックルしだした。

牙では歯が立たないと思ったのか、全身を使い体当たりをするのが彼等にとっても精一杯の行動の様だ。

それだけ、怪我をしている同士を見捨てたくなかったのかもしれない。

「ギラムさん。」

「心配すんなアリン。 後でレスタを頼むぜ。」

「・・・はい。」

ギラムにそう言われ、アリンはウォンドを手にした。
その様子を見た後、ギラムは怪我をしたナヴァルに手を差し出した。

〈シャー・・・〉

「安心しろ、お前らの敵じゃない。俺はただ、お前の怪我を治したいだけだ。」

そこにいたナヴァルに対して、ギラムは言った。
だが倒れていたナヴァルはその言葉を信用せず、ギラムの腕に噛み付いた。

「クッ・・・！」

ナヴァルの発達した牙に噛まれ、ギラムの身体に痛みが走った。
下手したら自分の腕を噛み千切られてもおかしくない力であり、そのまま強引に持っていかれたら骨ごと行かれてしまうほどの強さだ。
相手が小型の原生生物であっても、手痛い攻撃である。

「主！！」

「大丈夫だ・・・ フィル。」

痛み顔に顔を歪ませつつも、後ろで叫んだフィルスターを安心させるべくギラムはそう言った。
幸い噛みついてきたナヴァルの体力が多くはない事もあり引き千切ろうとはしないものの、噛まれている個所からは血が滲み出ていた。

『・・・』

「怖がらせ、ちまったな・・・ だが信じてくれ、俺は敵じゃない。」

痛みと相手の体内属性である雷で痺れる体をよそに、ギラムはナヴァルを説得し続けた。
体制は変わらず噛まれたままだったが、何時しか気づいた時には背後の攻撃は止まっている様にも思えた。

すると、段々とナヴァルの噛み付く力が弱くなり、ナヴァルは口からギラムの手を出した。

「ありがとう、信じてくれて。」

〈・・・ シャー・・・〉

ナヴァルはそう言うと、その場に力尽き、うつ伏せに倒れた。
ギラムはそのまま倒れたナヴァルを抱き上げた。

『弱ってるな・・・ それに、コイツ何処かで・・・』

痺れの治まってきた体をよそに、ギラムはナヴァルを見た。
抱き上げたナヴァルはやはり弱っており、呼吸が途切れ途切れになっていた。

「お前らはコイツを守ってたんだよな。 治療は俺がやる、安心してくれ。」
〈・・・〉

その場にいた別のナヴァル達に言い聞かせるようにギラムは言うと、その場を歩き出した。

「癒しの力よ。」

ギラムが無事帰ってくると、アリンは早速レスタのテクニックをギラムに唱えた。

「主・・・」

「心配かけてすまなかったな。 大分弱ってる、何処かで手当てをしてやらないと。」

抱えているナヴァルを見せつつ、この後の行動を考え出した。

「手当ては僕がやります。 こんな時のために、医師免許は取得済みです。」

不意にウィンドベルは、ギラムに言った。

「ベル、いつの間に・・・ でも原生生物だぜ？」

「平気です。 そちらの情報も取得済みです。」

「すげえな。 こんな状態だが、大丈夫か？」

フィルスターが驚く中、ウィンドベルはナヴァルの様子を見た。
体力の残りは少なく、外傷も目立つ程度に多かった。

「何とかやってみます。　ここにいるナヴァルさん達のためにも。」

「そうだな。　頼む。」

ウィンドベルの力強い答えを聞いて、ギラムはとりあえず任せる事にした。

「コイツの面倒はしばらく俺らが見る。　元気になったら、お前らの所に顔を出すからな。」

「信じて、待っててくださいね。」

ギラムとアリンは共にその場にいたナヴァル達に言うと、急いでマイシップへと戻って行った。

マイシップが飛び出すと、残された別のナヴァル達は顔を上げ、マイシップを見送った。

－続く－

始まりを告げる室内楽

惑星モトゥブでの依頼を手っ取り早く済ませ、ギラム達はマイシップでリトルウィング支社へと引き返し、アリンのマイルームへと向かって行った。

《・・・》

「ベルちゃん。　この子は大丈夫でしょうか・・・」

自室へ先に戻ったアリンとウィンドベル。

ギラムから引き渡されたナヴァルを抱え、アリンは心配そうに問いかけた。

「任せてください。　絶対に安全域まで治療してみせます！」

部屋の奥にあるドレッシングルームを貸し切り、ウィンドベルは倉庫から治療に必要な道具等を準備だした。

果たして原生生物用なのかは判らないが、メスや注射器。　無菌テント等が用意された。
何処で揃えたのかも不明だ。

「よし。　アリンさん、そこの子をこの中にお願いします。」

「・・・ええ。　お願いします、ベルちゃん。」

ウィンドベルからの指示を受け、アリンは抱えていたナヴァルをテントの中に入れた。
テント内に入ったのを確認し、ウィンドベルもテント内へ入り、チャックを閉めた。

「終わるまで時間がかかりますので、お隣で待ってて下さい。」

術式に必要だと思われるマスクや帽子をしつつ、ウィンドベルはそう言った。

「はい。　何か出来る事があったら、おっしゃって下さいね。」

「了解です。」

ウィンドベルからの答えを聞き、アリンは素直に隣の自室へと引き返して行った。

「・・・よし。　じゃ、麻酔打ちますから、しばらく寝ててくださいね。」

《シャア・・・　z z z・・・》

体が痛み動かない事もあり、ナヴァルは素直に注射器を受け、寝てしまった。

「・・・これでよし、と。」

ナヴァルが寝た事を確認し、ウィンドベルはメスを手に取った。

『アリンさんのためにも、頑張らないと。』

ゆっくり的確に、ウィンドベルは手術を開始して行った。

部屋で原生生物の手術が行われている頃。

ギラムとフィルスターは、クラウチのいるリトルウィング支社へ依頼完了の報告へと向かっていた。

「・・・おお、きたか。」

部屋へ入ると、クラウチが2人の姿を見つけ、声をかけつつ手招きした。

「アリンが受けた、テノラ・ワークス社からの依頼完了の報告に来た。 依頼元からの書類がコレで、領収書がコレだ。」

クラウチのデスクへと行くと、ギラムは持っていた書類を全て、クラウチに手渡した。

「ご苦労さん。・・・アイツはどうした？」

書類に目を通していたクラウチは、ふとアリンの姿が見えない事を思い、問いかけた。

「ああ・・・ ちょっと野暮用で席を外してる。 変わりに俺らが報告に来たんだ。」
「後で顔を出すように、俺らから言っとくぜー」

少々問いかけの答えに戸惑いつつ、2人はそう言った。

「野暮用か。 じゃ、こっちで処理しておくからな。」

「ああ、頼む。」

そこまで深くは追求せず、クラウチは書類をパソコンに入力して行った。
すると、

♪～♪♪～

支社内にあったテレビが、ニュース番組の開始を告げた。

【ハァ～イ、グラールチャンネル5。 ニュースキャスターのハルです。】

いつも通りのニュースキャスターであるハルの声と共に、ニュースが始まった。
その声を聞き、支社内にいた社員達がテレビを見出した。

【今日のニュースを、ピックアップ！】

ハルの声と共に、画面の奥にあった小さい画面が移動し、ニュースを伝え出した。

【本日、午前9時頃。 惑星モトゥブ内のとある研究施設で、実験生物が逃げ出したとの報告が
発表されました。】

『モトゥブ？』

ギラムとフィルスターはその単語を聞き、ニュースを注意深く聞きだした。

【逃げ出した原生生物は、研究施設内での生物ナンバー09の生物で、外見は『ナヴァル』に似
ているとの事です。】

『ナヴァル！？』

気にかかる単語を再び聞き、2人は驚きつつニュースの内容を聞いて行った。
そんな2人の様子をよそに、ハルは発表された固体に関する情報を言って行った。

【・・・なお、その原生生物は研究内では重要危険生物と認定されており。 ガーディアンズ他
、多数の軍事会社に抹消任務が発令されました。】

「お。 何か来たな。」

ハルが言ったのとほぼ同時に、クラウチのパソコンに依頼の受信と思われる音と声がした。

【以上。 ヘッドラインニュースでしたー】

そして、ニュースは終わりを告げた。

『主、やばいって。 逃げ出したナヴァルって、確実にアレの事だぜ！？』

ニュースを聞き終え、フィルスターはギラムの耳元で囁いた。

『ああ。 ここにいとバレたら、確実に全社員の格好の標的だ。 なにせ、』
「！？ 依頼料こんなに出んのか！？ ……こりゃあ、一月毎日酒飲んだとしても、支払いに加えて今までのツケが払えちまう額だぞ。 ……いいな。」

届いた依頼内容と額を見て、クラウチは狂喜乱舞していた。

『依頼報酬額が半端無い。 危険という事はさておき、凄腕の傭兵達が進んでこのミッションに参加すると、今いる別のナヴァル達さえ手当たりしだいやられちまう。』
『どうする、主。』

「おう、お前らは参加すっか？ この依頼。」

2人の密談をよそに、クラウチは届いた依頼をギラム達にも紹介しだした。
その書類には、消去すべき対象のナヴァルの写真が入っており、そこにはついさっき助けたばかりの、あの黄色いナヴァルの写真が載っていた。
内容は簡単なもので、武器指定無しで消去するだけの簡単なものだった。
依頼内容の最後の報酬額欄には、

「・・・？ 一、十、百・・・ 1000万メセタ！？」

「こんなに！？」

今まで受けてきた依頼の報酬額には及ばない、最高額が乗せられていた。
ゼロの数字が多すぎて、一瞬読むのに戸惑う額だった。

「どうだ？ 対象のナヴァルー匹倒すだけで、こんなに貰えるんだぜ？ 虫が良過ぎる話だろ。」
「・・・」

クラウチが楽しそうに話す中、ギラムとフィルスターは立ち尽くすしかなかった。

『１０００万・・・ そんなにあったら、主当分仕事しなくても生きて行けるぜ？』

フィルスターが額に魅了されている様な様子で、ギラムにやるように進めてきた。
普通にあって、数日では使いきれない額であり、普通に過ごす分には全然平気に暮らして行けるという事もあるからだろう。

「・・・クラウチ。」

その言葉を聞き、ギラムはクラウチに言った。

「その依頼。 俺達は降りるぜ。」
「え！？」

ギラムの予想外の答えに、クラウチとフィルスターは叫んだ。

「主！ なんで！？」
「お、おい！ いいのか！？ こんなに簡単でいい依頼は今後絶対に来ないぞ！？」

フィルスターとクラウチはほぼ同時に、反論してきた。
そのやり取りを耳にし、支社にいた社員達が静かに見守っていた。

「ああ。 俺には向かない仕事だ。 行くぞフィル。」
「お、おい主！！」

ギラムはそう言うと、支社を後にした。
フィルスターは相変わらずギラムの右肩の上におり、一緒に連れて行かれた。

「・・・なんだ？ 真面目なアイツが、良い依頼に行かないなんて。」

今までのギラムの反応とは違い、クラウチは不思議そうに入り口を見ていた。

「シャッチョサン。 どうしたの？」

やりとりが終わった事を確認し、チェルシーはそそくさとクラウチの元へと来た。

「・・・いや。 なんでもない。」

チェルシーの言った事に対して、クラウチはそう言った。

「ソウ言エバ、さっきウルから、シャッチョサン宛テニ伝言が届いてたヨ。」

「そうか。 後でそれを送っておいてくれ。」

「リョウカイネー」

チェルシーは用をクラウチに伝え、自デスクへと戻って行った。

「なあ、主ー」

「ウルサイ・・・ 少し黙ってろ。」

リトルウィング支社を後にしたギラムとフィルスターは、その足でマイルームへと向かっていた。

「悪かったって、そんなに怒らないでくれよ。 機嫌直し」

「ソレで機嫌が悪い訳じゃねえよ。」

「え？」

ギラムの言った事に対して、フィルスターは驚いた。

「じゃあ、何で。」

「あの依頼。 何か変だと思わないのか？」

フィルスターからの問いかけに、ギラムはそう言った。

「依頼書についてた固体情報、アレが引っかかるんだ・・・ 彼がまさしく逃げたナヴァルとしたら、記載ミスがある。」

ギラムはそう言いつつ、先ほど見た依頼書のデータコピーした物を呼び出し、フィルスターに見せた。

「記載ミス？」

「ここに『噛まれると即麻痺による感電死の恐れ大』と書いてある。 だが、俺は噛まれても痺れはしたが、死んではない。 フィルが乗ってる俺の肩は、幻か？」

「・・・いや。」

ギラムが言った事に対して、フィルスターは自分が乗っているギラムの右肩の感触を確かめ、そう言った。

筋肉質な体に柔らかい肉厚、人間の皮膚独特の感触があった。

「だったら、これはあからさまな記載ミスだ。 ビーストだから効かないっていうのなら、すでに書類に書いてあるはず。 それに、依頼書に記載ミスをする事は、禁止されているはずだ。 ましてやニュースに出るほど大々的な物にミスは許されない。」

フィルスターの答えを聞き、ギラムはそう言い、こう言った。

「この依頼、何か裏があるぜ。 フィル。」

ギラムは何かを確信し、そう言った。

「ああ。 面白くなりそうだな、主。」

「面倒だけどな。」

フィルスターの言った事に対して軽くそう言うと、2人はアリン達の待つマイルームへと向かって行った。

ー続くー

社内事務所を後にしたギラムとフィルスターは、その足で例のナヴァルの居るアリンの部屋へと向かって行った。

その間、先ほど入手した情報をどう伝えるべきか、ギラムは考えていた。

『ストレートに言ったとしても、事件の真相を見つけるのは難しいからな・・・ どう手順を踏むか、だな。』

今の状況に少々困惑しているアリンの事を思い、ギラムはそう思った。

『とにかく、今の事を知らせるのが先決だな。 知らずに他者に話す可能性もあるからな。』

しばらく考え、とりあえず伝えるべき事を検討し終わると、ギラムは部屋の扉を開けた。

シャーツ

「あ、ギラムさん。 お帰りなさい。」

扉が開くのとほぼ同時に、中からアリンの声がした。

ギラムが部屋に入ると、リビングに置かれたイスの一つに、アリンは座っていた。

近くのテーブルにはティーセット一式が置かれており、術式の終了を待っている様子だった。

「クラウチに依頼の報告をしておいた。 後で一応、顔を出しておいてくれ。」

「わかりました。」

ギラムがそう言いつつフィルスターを降ろすと、アリンはそう答えた。

「ベルとあのナヴァルは？」

床に降りたフィルはそう問いかけつつ、アリンの元へ歩み寄った。

「奥のドレッシングルームで術式を行っております。 もうすぐ、終わると思うのですが・・・」

シャツ

アリンがそう言うのを待っていたかのように、丁度のタイミングで奥の部屋の扉が開いた。そこには、白い帽子と割烹着、ゴム手袋を身につけた状態のウィンドベルが出て来た。

「ベル。 終わったのか？」

扉が開いたのを見て、フィルスターはウィンドベルの元へと行った。その様子を見て、ギラムとアリンもそばへと寄った。

「はい、手術は無事終了しました。 焼け焦げた皮膚等を取り除いて、ある程度の傷を縫っておきました。」

ウィンドベルはそう言うのと扉の奥が見えるよう横に移動した。奥の部屋には、先ほどの黄色いナヴァルが無菌テントに入ったまま、すやすやと寝息を立てていた。ナヴァルの体には、目立たない程度に傷を縫った後が多々残っていた。

「原生生物の再生能力でしたら、時期に縫い糸を吸収して元の姿に戻るはずですよ。 今は麻酔が効いてるため、夢の中ですよ。」
「そうでしたか・・・ よかった。」

ウィンドベルからの経過報告を聞き、アリンは一安心した様子を見せた。その行動から、とても心配していた事が見て取れた。

「・・・」
「？ どうした、主。」

そんなアリンをよそに、フィルスターは自分の主であるギラムの様子を見て、問いかけた。

「アイツ・・・ 俺の昔の友人に似てると思ってな。」
「友人？」

ギラムの呟いた言葉を聴き、フィルスターは首をかしげた。そんなフィルスターをよそに、ギラムはナヴァルの元へと寄り、肩膝を地面に付けた。すると、それを察したナヴァルはうっすらと目を開け、寄って来たギラムを見た。

〈シャー・・・〉

「まだ無理するな。 お前、あの時のナヴァルだろ？」

まだ完全ではない様子の鳴き声を聞き、ギラムはそう言った。

ギラムが言った事に対して、ナヴァルは頷いた。

「・・・ようやく会えた・・・ ゴメンな、今まで一人にして。」

〈シャーッ〉

ナヴァルの答えを聞き、ギラムはナヴァルの頭を撫でつつ侘びを告げた。

その行動に、ナヴァルは安心した様子を見せ、再び眠りについた。

「ギラムさん。 ナヴァちゃんのお知り合いだったんですか？」

ナヴァルをひとまずおき、先ほどのリビングへと戻ったギラム達。

先ほどのやり取りを目にし、アリンはギラムに問いかけた。

「まあな。 俺に初めて出来た友達だって言うが、原生生物が友達なんて、今考えると少し変だな。」

アリンからの問いかけにそう答えつつ、ギラムは苦笑した。

「いえ。 それだけギラムさんがお優しいという事でもあります。 凄い事ですよ。」

「そっか。 ありがとさん。」

ギラムの言った事を気にしつつ、アリンはフォローした。

「で。 主、さっきの事はどうするんだ？」

ひとまず和解したギラムを見て、フィルスターは先ほどの事を話すよう促した。

「ああ、そうだったな。」

フィルスターに言われ、ギラムはアリンとウィンドベルを見た。

「さっき社内に大規模な討伐ミッションが発令された。 場所は惑星モトゥブ全域だ。」

ギラムはそう言いつつ、先ほどの依頼書のデータをコピーした物と呼び出した。

「あ。 先ほど傭兵の皆さんが騒がれていたのは、そのためだったんですね。」
「報酬額が馬鹿にならない依頼だったからな。 で、対象の原生生物が、コレだ。」

アリンの言った事に言葉を付け加え、ギラムは依頼書に記載されている写真を見せた。
そこには、別室で寝ているナヴァルそのものを撮った写真が掲載されていた。

「嘘・・・ ナヴァちゃんが対象、何ですか・・・？」
「惑星モトゥブでお仕事をしていましたから、間違いがありませんね。」

アリンが驚く中、ウィンドベルは冷静に分析し言った。
彼の身柄を確保した惑星と、先ほどまで行っていた依頼の惑星が同一しているため、狂いはなさそうだと。

「アイツは、以前とある原生生物の研究所から脱走した固体の１人らしい。 間違いは無い。」

「・・・ギラムさんは、どうするんですか？」

少々まだ落ち着かない様子で、アリンはギラムに問いかけた。

「もちろん、この依頼には参加しない。 フィルも同様だ。」
「俺はどの道参加権は主によるから、元々無いしな。」

ギラムとフィルスターは、アリンにそう告げた。

「よかった・・・」

その答えを聞き、アリンは安堵の様子を見せた。

「でも、裏で行動しようとは思ってる。」

「え？」

その行動も束の間、ギラムはアリンとウィンドベル、そしてフィルスターに言った。

「裏って・・・ どういう事ですか？」

「この依頼書には、記載ミスのある点がある。 その部分でも、俺は参加しない理由の1つとして上げるぜ。」

アリンからの問いかけに、ギラムは先ほどの依頼書のコピーの項目を指さした。
そこに書かれていたのは、対象生物の固体情報だった。

「記載ミス？」

アリンとウィンドベルは依頼書のコピーを見つつ、ミス部分を探した。

「『噛まれると、即麻痺の感電死の恐れ大』って書いてある。 だが実際俺は噛まれたが、痺れはしたが死んではない。」
「そう言われると、確かにそうですね。」

依頼書のコピーを見つつ、ウィンドベルはそう言った。

「主がビーストって事で効かないんだったら、記載してあるはずだからって。 主の推測も立ってるぜ。」
「確かに、記載ミスは許されない行為と、クラウドさんがおっしゃっていました。」

フィルスターが言った事に対して、アリンは以前クラウドが言っていた事を思い出しつつ言った。
。

「それに。 元々アイツはあんな派手な色はして居なかったし、体内属性は地。 今とは正反対の属性だ。」

アリン達に見せたデータコピーを消し、ギラムは言った。

「じゃあ、その研究所で遺伝子操作されて・・・ 今のような事になってしまったって事で
すか？」

「それが1番道筋として正しいと言えると、俺は思うぜ。　アイツは以前、誘拐されたからな。」
「そんな・・・」

ウィンドベルの仮説に賛同しつつ、ギラムはナヴァルの過去を伝えた。
すると、ソレを聞いたアリンは少々涙ぐみ、隣で寝ているナヴァルの心中を察するような目をして
ていた。

「ギラムさん。　ナヴァちゃんを、助けてあげる事は出来ないのでしょうか・・・」

流れそうになる涙を抑えつつ、アリンはギラムに言った。

「今は大事になってるから、早々に沈静化するのは無理があるな・・・」
「そう・・・ですか・・・」

アリンの申し出に、ギラムは少々難しそうな顔でそう答えた。
ギラムからの答えを聞き、再びアリンは顔色を暗くした。

「だが。　時間が経てば、時期にうやむやに出来るかもしれない。　結局はアイツが見つからな
ければ、話は始まらないわけだしな。」
「確かになー」

しばらく考えていたギラムは結論を導き出し、呟くような声から段々と普通の声の大きさにし
つつ、そう言いきった。
ギラムの発言に、フィルスターも賛同した。

「じゃあ・・・」
「ああ。　アイツに出来る限りの事をするつもりだ。　協力、してくれないか？」

ギラムはそう言うと、アリンとウィンドベルに協力をしてくれるよう、求めた。

「もちろんです。　誘拐されて、実験生物として扱われて・・・拳句の果てに殺されそうになっ
ているナヴァちゃんを、見捨てるなんて出来ません。」
「僕はアリンさんの意見に賛成です。　出来る限りの事を、彼のためにしてあげましょう。」

結果的にどうなるかは分からないが、アリンとウィンドベルは行動を共にすると言った。

「主。俺も出来る限りの事はするぜ。」

2人の発言を聞き、フィルスターも同様に行動に賛同した。

「ありがとう。感謝するぜアリン、ベル。フィル。」

その場に居た3人の意見を聞き、ギラムは嬉しそうに感謝の言葉を述べた。

『・・・』

そんな別室の4人のやり取りを聞いて、ナヴァルは薄目を開けつつ今後の事を考えていた。

傭兵達のターゲットになった以上、逃げ切る事は出来るとは思えない。

時期に見つかり、自分は処分される。

結果は見えきっている事だが、ナヴァルは少しだけ、希望が見えた気がした。

今自分をかくまっている昔の友と、その友の友人達。

自分を裏切るかもしれないが、もうどうなっても、最終的には結末が一緒。

それならば。

以前の友との時間を、再び過ごす。

たとえどんな結末が待っていようと、以前の友と再び行動を共にする

と、ナヴァルはそう思い、再び彼の事を意識しつつ、目を閉じた。

－続く－

理想を知った小夜曲

ウィンドベルの施した手術後の数日後。

縫い目部分を自己再生し終え、以前と変わらない元気な姿となったナヴァルを連れて、ギラムは一時自室へと向かって行った。

同様にフィルスターも一時部屋へと戻り、2人は部屋をロックした。

「いいか、フィル。」

部屋へと入り、自室と廊下を区切る扉をロックしたかを、ギラムはフィルスターに問いかけた。

「おう、完全に外部からの情報源を遮断したぜ。 音声共にな。」

「了解。」

フィルスターからの報告を受け、ギラムは羽織っていた上着の止め具を外しつつ、片膝を地面につけた。

すると、ギラムの服の間に隠れていたナヴァルが滑り落ち、部屋へと着地した。

ここまで来る途中の道のり中、ナヴァルはギラムの着ていた服の中に隠れており、丁度布地とギラムの鍛えられた体に挟まれる感じで運ばれていたのだ。

そのため、筋肉質だが細身のギラムには似つかわしくない体系になっていたのは、言うまでもないだろう。

「ちょっと違和感バリバリだったが、何も言われずに来れたな。」

「そうだな。」

ロックを再確認し終え、ギラムによって運ばれてきたナヴァルを見つつ、フィルスターは言った。

「苦しくなかったか？ ナヴァル。」

《シャーッ》

無事に部屋へと到着した事に安心しつつ、ギラムはナヴァルに問いかけた。

そんなギラムに対して、ナヴァルは平気だった事を、全身を使って表現していた。

ギラムがマイルームにナヴァルを招待した理由。
それは、過去の事と今の事。そして、今後の事についてだった。

「ナヴァル。 コレを着けてもらってもいいか？」

ギラムはそう言いつつ、部屋の小物入れに入れてあった物を取り出しつつ問いかけた。
取り出した物とは、シンプルなリストバンドだった。

《？》

見せられたリストバンドを見て、ナヴァルは不思議そうに見ていた。

「主。 何だソレ。」
「とある筋で手に入れた翻訳機だ。 コレがあった方が、会話が楽だしな。」

ギラムはそう言うと、ナヴァルの右足を手に取り、太めの太ももに装着した。

「・・・よし。 ナヴァル、ちょっと喋って見てくれ。」

しっかりと装着した事を確認し、ギラムはそう言った。

《喋ってみろって、そんな無茶な事・・・》

「え！？」 《え！？》

すると、先ほどまで鳴き声しか発せなかったナヴァルがちゃんと言語を喋ったのだ。
正確に言うと、翻訳されたと言った方が正しいだろう。

「主！ 何だコレ！？」

未だに何が起こったのか理解出来ず、フィルスターは叫ぶ様に問いかけた。

「だから翻訳機だって言っただろ。 どんな言語でも、管理者の喋る言語に変えてくれる言語翻

訳機。　とりあえず、コレで会話は出来そうだな。」

《・・・ああ。》

まだ少々何が起こったのか理解出来ない様子で、ナヴァルはそう言った。

その後喋れる様になったナヴァルと共に、ギラムは昔の出来事等、体に何をされたのかなど、事件の裏側を知るべく質問を繰り返していた。

ナヴァルも親しいギラムの為ならばと、自分の身に起こった事、あの子の生活や実験内容。そして、生物研究所を脱走する際にあった事。　全てを話した。

「・・・そんな事があったのか。」

自室の奥のベットルーム周辺のカーテンを閉め、ギラムとフィルスターは研究施設で起こった事を知った。

《だから、あの時研究施設に居た同士達は皆殺された・・・　親しかったアスタークやナノノドラゴ、パルシャーク達もな。》

「酷い事する奴らも居るんだな。」

一通りの事件の真相を聞き、ギラムとフィルスターは事件の裏側で起こっていた事を知った。

「でも、何で急にこんな事になったんだ？」

事情を一通り聞き、フィルスターはなぜそんな事になったのかを問いかけた。

《時々研究者達が話していた。　非合法的に研究をしていた事が表に漏れて、実験生物達との関係を絶たないといけないって。》

「事件の発端はそれが原因か・・・」

寂しそうに話すナヴァルからそう言われ、ギラムは相槌を打った。

《その時だ。　皆が俺を必死に逃がして、研究者達を逮捕させるために命をかけたのは。》

ナヴァルはそう言うと、ギラムの膝元へと移動した。
ギラムはそんなナヴァルを目にし、ナヴァルを抱き上げた。

《お願いだギラム。 今のお前なら、皆のためにあいつらを逮捕させる事が出来るんだろ？》
「なんで、俺がそんな事を出来ると思うんだ？」

ナヴァルにそう言われ、ギラムは質問を返した。

《そんなの見てれば分かるさ。 今のお前は、信頼できるパートナーも居るみたいだし、励ますような存在も居る。 今の立ち位置を見て、行動できない奴なんて思っていないさ。》
「・・・そっか。 やっぱりナヴァルには敵わないな。」

ナヴァルが考えていた事を聞き、ギラムは納得しつつ頭を撫でた。

「俺も出来る限りの行動をしようと思ってる。 お前には借りがあるし、偽りを俺ら傭兵に持ち出して、またアリンを悲しませるような事になりかねないからな。」

ギラムはそう言いつつ、ナヴァルをベッドの上に置き、依頼書と録音した会話を記事とした情報を呼び出した。

《じゃあ・・・》

「ああ。 お前を元々暮らしていた場所に、俺は絶対に帰すと約束するぜ。 アリンやベル、フィルも協力してくれるって言ってくれたしな。」
「おう。」

一通りの当事者の話を聞き終え、ギラムとフィルスターは決意を新たにした。

「お前を守ってくれた皆のために。 事件を最善の方向へ導こうぜ。」
《ありがとう・・・ ギラム。》

ギラムの決意を聞き、ナヴァルは嬉しそうに言い、涙を流した。

「とりあえず、まずは研究施設の跡地の周囲観察が最善だな。 フィル、座標を割り出してくれ。」
「了解主ー」

手元にある情報源を頼りに分析し、ギラムはフィルスターに指示を出した。
主人からの申し出を聞き、フィルスターは検索機能を駆使して座標を割り出し始めた。

「・・・ よし、見つけたぜ主。 座標情報をそっちに送るぜ。」
「了解。」

その後すぐに必要な情報を得ると、フィルスターは情報をギラムのデータベースへと転送した。
転送して数秒経つと、ギラムの持つ機械の方へとデータが転送された。

「よし。 後は現地に行って証拠等を探してみる必要があるな。 アリンとベルの予定を聞いて、行く日を検討しよう。」

必要最低限の情報が揃い、ギラムはそう言った。

「了解。 すでにアポは取ってあるぜ。」
「サンキューフィル。」

フィルスターからの返事を聞き、ギラムは一時手元のウィンドウを閉じた。

『今と昔じゃ、ギラムも全然違うんだな・・・』

目の前で行われていた情報収集活動を目の当たりにし、ナヴァルはふと思っていた。
傭兵になる以前までのギラムを唯一知っている彼だからこそ、今と昔の違いがはっきりとしている事が分かっていた。

「ナヴァル。 また移動するから、服に入ってもらえるか？」
《ああ、分かった。》

下準備を終え、ギラムは再び上着を羽織り、再びナヴァルを服と自分の体の間に隠した。
中に入ると、ナヴァルは少し上下に動いた後、安定する場所に潜り大人しくなった。

『信頼出来るパートナーが居るからこそ、こんな風に生き生きと活動出来るんだろうな・・・』

ギラムの体が動いたのを察し、ナヴァルは運ばれつつそう思った。

一番最近まで知っていたギラムと今のギラムとでは全然違うという点が多々見付き、ナヴァルは少々嬉しそうにギラムの鍛えられた腹筋と胸筋に顔をうずめた。

『よかったな、ギラム。』

そして、再びアリンの部屋へと運ばれて行った。

そんな彼らの様子を、遠くから見つめる視線が・・・

『・・・なるほど。 多少変な理由は、コレかもしれないわね。』

異様に服の盛り上がっているギラムとフィルスターを見つつ、視線の主はそう悟った。

『そうすると。 まだ仕事が残っていそうね。』

主はそう呟く様に言うと、マイルームの連なる廊下を後にした。

－続く－

惑星モトゥブ・目標座標地点

アリン達との交渉を終え、次の日。

ギラムとフィルスターとナヴァル、そしてアリンとウィンドベルは表向きはモトゥブの依頼だと偽り、惑星モトゥブへと足を運んだ。

「・・・結構、周囲は砂漠の何もない場所なんですね。」

マイシップから外の状況を伺いつつ、アリンはそう呟いた。

再びやってきたモトゥブの荒れた大地を見て、新しい風景に新鮮なご様子だった。

「やっぱり。 表向きから情報を漏らしたくない裏の仕事をする方々にとって、こういう何もない人目に付き難い場所を選ぶのかもしれませんがね。」

「そうかもしれないな。 だからこそ、ナヴァルが脱走に成功しても、目撃情報が無かったんだろうからな。」

ウィンドベルからの仮説を聞きつつギラムはそう言うと、別の窓辺から外を見ているナヴァルを見た。

忌まわしい記憶のある場所だからか、少々暗そうな顔をしていた。

いつも元気に振っていた尻尾は、今日は寂しく揺れていた。

そんなナヴァルを見て、ギラムはそばに移動した。

「絶対に、真相を暴いて見せしめてやろうぜ。 お前の仲間達のためにもな。」

励ますようにそう言うと、ギラムはナヴァルの体を優しく撫でた。

《ああ・・・》

そんなギラムからの励ましを受け、ナヴァルは顔色をいつも通りの元気な表情へと変えた。

「・・・？　おい、主ー」

操縦席に居たフィルスターは、前方に何かを見つけ、ギラムを呼んだ。

「どうした、フィル。」

「あれ。　あの時のナヴァル達じゃね？」

呼ばれたギラムがフィルスターのそばに行くと、フィルスターは前方の崖上を指差した。
するとそこには、先日ナヴァルをかくまっていた土気色をした普通のナヴァル達が溜まっており、こちらを見ていた。

「きっと、ナヴァちゃんの帰りを待って居たんだと思います。」

アリンはそう言うと、操縦席に近づいていたナヴァルを抱き上げ、彼の目からも見える高さへと抱き上げた。

すると、こちらを見ていたナヴァル達が姿を確認し、嬉しそうにジャンプしていた。

「フィル。　ナヴァル達の少し手前に、船を着陸させてくれ。」

「了解主。」

主人からの指示を受け、フィルスターは座標地点より少し前の砂漠へ、船を着地させた。

船が無事モトウブの砂漠地帯へと着地すると、崖の上にたむろっていた野生のナヴァル達がいっせいに移動し始め、船の出入り口へと向かってきた。

そしてアリンがナヴァルを抱えて船を降りると、野生のナヴァル達は嬉しそうにジャンプしだし、鳴き声をあげた。

「待たせて済まなかったな。　治療が完全に済んだ事を、報告に来たぜ。」

ギラムがそう言うと、アリンは抱いていたナヴァルを地面に降ろした。

すると、ナヴァル達がいっせいに集まりだし、嬉しそうに顔を擦り付けあっていた。

《心配かけてゴメンな。　ギラム達のおかげで、傷は元通りだ。》

《シャーッ！！》

ナヴァルからの報告を受け、野性のナヴァル達は安心した様子を見せた。

束の間の再開を済ませた後、ギラム達は野生のナヴァル達と共に、目標座標地点に立っている原生生物研究施設へと足を運んだ。

工場は荒れた砂漠地帯の中に存在し、周りが自然にできた崖に囲まれており、周りからの監視から逃れるような場所に設置されていた。

見た目はシンプルな作りとなっているが、大きさは普通の研究所とは思えないほど大きな物だった。

その分監視も厳しかったのか、工場の周りには柵が張られており、監視所と思われる地点も多々存在していた。

だが今は工場はもぬけの空のようで人の気配は無く、監視所には人の姿が無かった。

工場も所々焦げており、爆弾も多く使用されたような形跡が残っていた。

「すでに人はいないみたいですね。」

「みたいだな。」

用心のためロッドとライフルを片手に様子を伺っていたウィンドベルとフィルスターは、後方で工場の様子を見ていた主達に言った。

「足跡を消すため、それなりに施された後があるな。 そうなると、資料も見つかりにくそうだな。」

工場内に潜入し、辺りの壁を見つつギラムは言った。

動いていたと思われる小型監視マシナリーもすでに停止しており、元から情報を絶っているようだった。

「でも紙の資料は無くても。 何かナヴァちゃん達のお友達だった方々の痕跡が見つかれば、それなりに有利になるかと・・・」

「そうだな。」

用心深く辺りを観察していたアリンはそう言うと、ギラムは近場にあった1つの研究部屋らしき部屋に入った。

部屋の明かりすでに無かったが、ギラムは持っていたペンライトで辺りにあるメカなどを片っ端

から調べ始めた。

同様にフィルスターも部屋の搜索を開始し、アリンとウィンドベルは他の部屋を調べ始めた。その様子を見ていたナヴァル達も、何か痕跡は無いかと探し始めた。

そんな当ても無い作業だったが、しばらく作業を進める事数時間・・・

「主。　これはどうだ？」

ギラムと共に搜索をしていたフィルスターは何かを見つけ、ギラムに見せた。持って来たのは、焼けたパーツの1つだった。

「焦げたマシナリーのパーツか。　コレがどうしたんだ？」

「ここ。　何かの液体が付着して、その後燃えた形跡があるだろ。」

フィルスターはそう言うと、その部分を指で削ってみた。すると、焦げていた表面部分が剥げ落ち、まだ液体のまま残っていた部分が露になった。

「粘着質のある液体・・・　成分は雷で、中に粒子も混じってるな。」

出てきた粘着質のある液体を指で触れ分析しつつ、フィルスターは言った。

「って事は、ワルムスの物かも知れないな。　粒子は誰かわかるか？」

「ちょっと待っててくれ。」

ギラムがそう言うと、フィルスターは採取した粒子をサーチしだし、何の物なのかを検索し始めた。

「・・・見つけた。　アスタークのブレスの一部だ。」

検索を終え、見つかった情報をフィルスターは報告した。

「よし。　1つ目の手がかり発見だな。」

ギラムはそう言うと、フィルスターが持っていたパーツを預かり、液体部分を剥がし採取した。

「ギラムさん。」

手がかりの内1つを見つけ終わると、部屋の入り口からアリンが顔を出した。

「アリン。 そっちは何か見つけたか？」

「はい。 ベルちゃんがコレを見つけました。」

アリンにそう言われ、横に立っていたウィンドベルは別の瓦礫を見せた。

そこには壁に使われていた鉄があり、焦げ目と何かが引っかいたような跡が残っていた。

「引っ掻き傷か？ それは。」

「はい。 焦げ目も周囲の物とは違い、原生生物の爪跡でした。 おそらく、ナヴァちゃんの言っていたナノノドラゴさんの物だと思います。」

《え？》

アリンの報告を聞き、部屋の隅を搜索していたナヴァルはウィンドベルの持っていた瓦礫を見た。

炎のテクニクや火炎放射器とは違い、もっと別の物質で焼き溶かされたような漕げ跡がついていた。

《・・・間違いない。 アイツの炎と翼部分の引っ掻き傷だ。 アイツ、こういう傷跡をよくつけたから。》

ウィンドベルの持っていたパーツを見終え、ナヴァルは結論を述べた。

「そうなる。 ナヴァルの言っていた仲間の原生生物達が居たって言う情報が大体揃ったわけだな。 残るはパルシャーク達か・・・」

《シャーッ》

ギラムが呟く様にそう言うと、壁際の低い部分を見ていたナヴァルが声を上げた。

その声を聞き、ギラム達は壁際に集まった。

「どうした。」

《この下に何かあるって。 俺らの力じゃ退かせない。》

野生のナヴァル達と言った言葉を通訳しつつ、ナヴァルは足元を見た。

そこには瓦礫が山積みされており、何かを隠している様子だった。

「よし。 じゃあ俺の出番だな、ちょっと退いててくれ。」

持っていた収集物をフィルスターに預け、ギラムは瓦礫を手にし、一つ一つ退かし始めた。

その様子を見て、周囲に居たナヴァル達は後方に逃げた。

「さっすが主。 無駄に力だけはあるよなー」

そんなギラムを見て、フィルスターは冷やかしを交えてそう言った。

「無駄とか言うんじゃねぇよ。 俺が居なかったら、フィルが退かすんだったんだからな？」

「へーい。」

作業をしつつ反論するギラムの言葉を聞いて、フィルスターは返事をした。

そんないつものトークを見て、アリンとウィンドベルは楽しそうに苦笑した。

「よし。 こんなもんだろ。」

瓦礫を全て退かし終え、ギラムは下に埋もれていた物を見つつ言った。

そこにはガラスに入っていたと思われる何かの液体サンプルがあり、周りのガラスが壊れた状態で落ちていた。

だが保管状況が良かったのか、中身は一滴も零れていなかった。

「何かのサンプルみたいですね。 瓦礫の下敷きと言う事は、騒動で落ちたって事でしょうか。」

「かも知れないな。」

ギラムが手にしたサンプルを見つつウィンドベルが言うと、ギラムは相槌を打った。

「フィル、解析頼む。」

「了解ー」

フィルスターの持っていたサンプルを預かり、ギラムは先ほど手に入れたサンプルをフィルスターに預けた。

サンプルを手にとると、フィルスターはサーチ機能を交えて、何のサンプルなのかを解析し始めた。

「解析終了。　どうやらこれは、属性変換サンプルみたいだな。　さまざまな粒子と化学物質が交じり合ってる。」

「属性変換サンプル？」

フィルスターの報告を受け、ギラムは不思議そうに言った。

「・・・あ。　もしかしてそれって。」

「ん？　どうしたベル。」

フィルスターの言った言葉を聴き、ウィンドベルは声を上げた。

「もしかしたらそれ。　ナヴァルさんの体内属性を変えた物質なのでは無いでしょうか。　手術中、それに似た液体も採取出来たので多分間違いは無いと思います。」

「なるほどな。」

ウィンドベルの報告を受け、ギラムはフィルスターの持っていたサンプルを受け取り、持参していたサンプルケースに2つのサンプルを入れた。

同様に、アリンも持っていた瓦礫の一部を写真に収め、ギラムに預けた。

「これで一通りの情報源が集まったな。　原生生物が居たって形跡も見つけたし、研究に使用されていたと思われるサンプルも見つけた。」

「そして、ここで乱戦があった痕跡もみつけた。　言い逃れが出来ない確かな情報だな。」

ギラムは一通り得たサンプル達を見つつ言うと、フィルスターも同様にそう言った。

「液体サンプルと僕の保管しているサンプルが一致すれば、もう研究者達はお縄確定です。」
補足として、ウィンドベルもそう言った。

「良かった・・・　ナヴァちゃんとそのお友達皆さんのために行動出来たんですね。」

《ありがとう。 皆。》

アリンが嬉しそうにそう言うと、ナヴァルがお礼の言葉を言った。

－続く－

平和の消えた交声曲

《・・・！！ シャーッ！！》

そんな喜びも束の間。

同室でその様子を見ていた野生のナヴァル達が一気に鳴き出し、威嚇するような声を上げだした。

「？ どうしたんだ？」

鳴き声をあげるナヴァル達に少々驚きつつ、ギラムは問いかけた。

《敵・・・ 誰か来る！》

「事前に起動した監視カメラに姿が映りました、ココの研究者達みたいです。 私達のマイシップを見て、様子を見に来たみたいです。」

「マジかよっ！」

アリンからの報告を受け、フィルスターが声をあげた。

すると、廊下の通路奥から何かの足跡が聞こえ始め、話し声も聞こえ始めた。

「・・・ったく。 まさかココを見つけて様子を見に来る輩が居るとはな。」

「先輩。 研究内容が公にバレたら・・・」

「うるせえ！ ガタガタ言わずにココに居るやつら全員を殺せばいいんだよ！」

小声のため多々聞き取りにくい部分があったが、ギラム達の耳にはしっかりと聞こえていた。足音は徐々に近づき、壁際に待機する彼等の元へとやってくるのが分かった。

「どうする主。 せっかく情報源を見つけたのに、蜂の巣じゃ話にならねえぜ？」

話し声を一室で聞きながら、様子を伺っていたフィルスターはギラムに問いかけた。

「クラウドさん達には依頼と言ったので、相手の誤魔化しも要因です。」
「とりあえず外に逃げるのが先決だな。 マイシップを見張られていると考えると、ココからしばらく出られそうに無いな。」
《・・・》

状況が少々劣勢になったのを知り、アリンとギラムが少々焦る中、ナヴァル達は様子を伺っていた。
小柄な彼等でも顔を出してしまえば見つかる可能性は高く、武器を手に行っているであろう彼等と殺りあうのは至難の業だ。
ましてやせかっく同士を助けてもらい、貴重な情報源を無駄にするのは惜しい。

《シャシャーッ》

すると、小声で話し合っていたナヴァル達が合図を出し合い、一斉に顔を外へと飛び出して行ってしまった。

《・・・！ お、おい！》

その様子を見たナヴァルは、敵の居る廊下へ飛び出して行ったナヴァル達を呼び止めようとした。
。だがすでにナヴァル達は特攻する体制に入っており、声が届いていない様子だった。

「どうしたナヴァル。」
《アイツ等・・・ 俺達のために罔になりに行きやがった！》
「何っ！！」

ナヴァルからの報告を受け、ギラムは廊下を見た。
すると、曲がり角で敵を発見した野生のナヴァル達が敵と戦っているのか、声が聞こえてきた。
彼等の雄叫びに翻弄される人々の声が、彼等の元にもやってきた。

「なっ！ なんで原生生物がこんな所にいんだよ！！」
「たしか全て駆除したはずなのに！！」
《シャーッ！！》

その声がした後、ライフルの発砲音が周囲に鳴り響いた。

《皆！》

その音を耳にしたナヴァルは外へと行こうとすると、尻尾に違和感を感じ全身が一気に後方へと引っ張られた。

「駄目だナヴァル。 今奴らの所へ行ったら、罔の意味が無いだろ！」

《離してくれギラム！ アイツ等を見捨ててなんて、俺はそこまで生きて居たくない！！》

尻尾を捕まれ身動きが取れないナヴァルに対してギラムは言う、ナヴァルは悔しそうに言った。

もうこれ以上、仲間を犠牲にして自分が生きて居たくないという感情の表れなのだろう。必死に前足をばたつかせており、彼等の元へと行きたい気持ちに溢れていた。

「！ 誰か居るのか！！」

その声を聞き格闘していた研究者達が声を上げ、こちらに走ってくる足音が聞こえた。

「マズイ！」

声を聞き、ギラムは慌ててナヴァルを抱え外へと飛び出した。

するとフィルスター達も同様に外へと飛び出し、別方向にある出口へと向けて走り出した。

「いたぞ！ 皆殺しにしろ！！」

曲がり角を曲がると同時に、ギラム達の後方からそう叫ぶ声が聞こえた。

「そうは行くかよっ！！」

ギラムはそう言うと、ナヴァルを抱えたまま罌を取り出し地面へと仕掛けた。

その隙にやってきた研究者達は、ギラムの姿を捉えた。

「起爆！」

ピッ！

その瞬間を狙って彼は設置したスタントラップを起動させると、研究者達は全員罠の餌食となり、その場に気絶してしまった。

罠の余波はまだ続いており、跡から来る研究者達の足を止めるには絶好の時間稼ぎだった。

「よし。今のうちに外へ逃げるぞ！」

敵の身動きを封じた事を確認し、ギラムは再び走り出した。

「ま・・待て！！」

その様子を見た研究者の1人はそう言いつつも、その場に崩れた。

敵の手から逃れようと走るギラムに抱えられていたナヴァルは、後方の曲がり角の方向を見た。するとそこには、さきほどまで元気いっぱいだった野生のナヴァル達が倒れており、彼等が去ると同時に靄となって消えてしまった。

『ゴメンな・・・皆・・・』

ナヴァルは心の中でそう呟くと、静かに涙を流した。

その後、研究者達の足を振り切り外へと脱出すると、彼等はマイシップのある方向とは別の砂漠地帯へと逃げて行った。

「・・・」

閉鎖されていた研究所を脱出し、砂漠地帯へとやって来たギラム達。

抱えられて移動していたナヴァルは静かにその場に降り立ち、走ってきた方向を気にししばらく動こうとはしなかった。

その様子を見たギラムはあえて声をかけず、しばらくそっとしておいてあげようとアリン達に告げた。

「それで、どうするんだ主。 マイシップが置きっぱなしじゃ、俺達モトゥブから脱出できねえぜ。」

とはいえ砂漠に居る事には変わりはないため、フィルスターはこの後どうするかを主人に求めた。

時々吹き荒れる砂が彼等の視界を遮り、無暗に移動しては彼等の体力も持たない。
ましてや今彼等の手元には重要な資料があり、この場で力尽きるわけには行かないのだ。
時期に荒れてくるであろう大地の風を見ながら、ギラムは周囲を見渡した。
すると、何かに気付いたかのようにとある方向を見ていた。

「・・・？ どうかしましたか、ギラムさん。」

「この場所、見覚えがあるな・・・ ナヴァル。」

《？》

「お前、まだこの辺りの地形って覚えてるか。 近くにオアシスがあるだろ。」

その様子を見たアリンの問いかけに彼は答えると、周囲の地形を覚えているかとナヴァルに問いかけた。

問いかけに対しナヴァルは周囲を見渡し、何かを思い出したかのように頷き彼等の先導を切る様に歩き出した。

彼の様子を見た4人は軽く頷き、先導を頼りにその場を移動し出した。

「・・・主、この辺りの事覚えてるのか？」

不思議なやり取りの後、歩いていたフィルスターはギラムに問いかけた。

彼の問いかけに対しギラムは頷き、この地で行動していた事を軽く説明し出した。

その際に足を運んだのが彼の言う『オアシス』であり、人気は無く砂嵐の被害を抑えてくれる絶好の場所だと言った。

長居は出来ないが、その日を過ごすには丁度良いと彼は思ったのだろう。

「あんまり砂嵐に当たっていると、服も汚れちゃうしな。 あそこなら軽い食事くらいならとれるし、水分の補給もできるぜ。」

「この後の情報手段は、どうしましょうか。」

「そうだな・・・ 連絡を取るにしても、この辺りじゃ回線が不安定だ。 回線途絶エリアって訳じゃないが、ちょっと難しい。」

ずっと砂漠に立っているよりは座れる場所が良いと告げ、食事も取れる事をギラムは説明した。この後の目途が立つと、変わって今度はウィンドベルが彼に仕入れた情報はどうするかと気にした。

連絡を取るにも今彼等が居る場所は回線が不安定であり、砂嵐が多く電波が安定しない。

途絶エリアとまではいかないが、それでも座標を伝えるには情報が少な過ぎる様だ。

軽く回線を繋ごうとギラムは手元の機械を弄るが、電波は繋がらずクラッド6への連絡が出来ない事を証明していた。

「何とかして、俺等が仕入れた情報を先方に伝えないとな。 ナヴァル達が必死になって俺達を外へと出してくれたんだ、無駄にはさせない。」

「そうですね。・・・ナヴァルさんの方が、私達よりもずっと辛いはず・・・ ・・・なるべく、暗い表情は見せないようにしましょう。」

「解りました、アリンさん。」

とはいえ自分よりも辛い相手がその場におり、自分達よりも危機感と共に罪悪感が増えている事を静かに言った。

何も言葉を口にしないが、ナヴァルの尻尾は正直であり移動する際も元気であった彼の尻尾は今では下に垂れており元気がない。

早く連絡を取り、事件を解決させてあげようとギラムとアリンは口々に言うのだった。

それを聞いたウィンドベルも賛同し、彼等はオアシスへと到着しその場で一晩過ごそうと中へと足を踏み入れて行った。

－続く－

砂漠の中にある人知れず存在する、オアシスの一角。

そこには周囲の小枝を主原料に焚いた火があり、その周囲を囲うようにギラム達が座っていた。調査するべくやって来た施設から遠く離れた位置に存在し、やって来た夜の闇から温もりを出すかのように火が燃えていた。

「悪かったな。 調査だけのはずが、野宿に近い夜にしちまってさ・・・」
「いいえ。 ギラムさんが私のために配慮をしてくださってる事は解っていますので、大丈夫ですよ。 ナヴァちゃんのためにも、私はちゃんとあの場所に帰還します。」
「ああ、分かったぜ。」

オアシスの水辺で焚いている火を調整しながら、ギラムはアリンに詫びを告げた。予定では情報を得た後、リトルウィングに帰還しクラウドに頼み込み事件を暴くつもりでいた。しかし予想外の乱入によりこうなってしまったため、暮らし上慣れていないであろうアリンを気にしていた。
華美な衣服を纏っている彼女のパーツに砂が付かない様、彼女が座る位置には周囲の葉を集め造り上げたシートが用意されていた。
お世辞にも砂が軽く付いているものの、地面に直接座るよりは良いと用意した代物だ。
そんな彼の気遣いもあってか、彼女は文句を言わずその上に腰を下ろしていたのだった。

「とりあえず、この後の事だが・・・ なんとか電波の良い場所を探して、クラウド達とコンタクトが取れるよう行動するつもりだ。」
《・・・》
「何処か、安定していそうな場所があるんですか？」
「あくまで推測だが、砂嵐が無く高台に位置する場所であればそれなりに安定していると思う。雪山でも、吹雪が強く坑道内はほとんど電波が届かなかったからな。」

火の調整を終えると、ギラムはこの後の事を考えた範囲で彼等に伝えた。
ずっとこの場に居ても情報源は伝えられず、ましてや自分達の生存も日数が増えていくにしたがって辛くなっていく。
その前に行動しようと告げると、ウィンドベルは行先は何処になるのだろうかと気にしていた。その話を聞いて、目を閉じ休んでいたナヴァルが彼等の元へと寄ってきた。

《・・・ギラム。》

「？ どうした、ナヴァル。」

《あの場所なら・・・砂は来ないし高台だ。 お前の使う通信機が、もしかしたら使えるかもしれない。》

その後彼はギラムに声をかけ、安定していると思われる場所があると告げた。

それは彼が捕まる前まで頻繁に行っていた場所であり、今ではその場所を知る者は彼とギラムだけだと言われる秘

密の場所だった。

あくまでその場所の名前を上げる事が無かった彼にとって、ナヴァルからの意見はとても意外な物だった。

「良いのか・・・？ お前の大切な場所だろ。」

《もう一度、俺もこの目で見ておきたいからな。 こんな事を言うとお前に悪いが、死ぬ前に見たい。 あの場所を。》

「・・・ 分かったぜ。」

どれだけ大切な場所かをわかっていたギラムは、彼に再度問いかけ良いのかと告げた。

彼等の知る場所であれば、砂嵐がほとんど来る事無く砂漠内で一番高台に近い位置とも言えるほど天候が安定している場所。

しかしナヴァルからしたら、彼等を元の場所に返す事もだがこの後の生存の危機もあるため最後に一度でいいから見ておきたいと言うのだった。

事件解決を目の前にした彼等にとってみたら野暮な言葉だが、それだけ真剣に考えている事をナヴァルは言うのだった。

彼の意見を聞き、ギラムは納得したように頷き彼の頭を撫でた。

「明日の朝、日が昇ったと同時にここを出よう。 あの場所に、俺が案内するぜ。」

「どんな場所なんだ？ 主。」

「この惑星に、あるとは思えない綺麗な場所だぜ。 俺も行ったのは1回だけだが、記憶から消える事が無いくらいの場所だ。」

彼の話聞いて決心した様子で、ギラムはそう言い朝にその場所を向かおうと言った。

しかしその場所を知らないフィルスター達からしたらどんな場所か解らず、主人である彼に事前に話を聞いていた。

「うわぁ、とっても良いなんですねっ アリンさん。」

「はい。・・・でも、あまり汚さないようにしましょう。 ナヴァちゃんとギラムさんの、大切な場所ですから。」

「はいっ」

モトウブではイメージ出来ないほどの場所と称される場所に行ける事を知り、ウィンドベルは楽しそうにアリンに言った。

軽く喜ぶ彼女であったものの、それだけ大切にされている場所を汚さないよう配慮する事を前提に行くと言うのだった。

楽しみにする反面、彼のおかれた状況と安全性が欠落している現状があるためか、浮かれるわけには行かないのだろう。

なるべく静かにしつつ、無事に終わる事を祈っている様だった。

その後話を終えたと、アリン達は造った寝床に横になり夜を過ごすのだった。

ギラムはと言うと、その日は火の番と周囲の警戒をするといい彼等の寝顔を見つつ夜を過ごすのだった。

ガサッ・・・

「・・・ん。」

それからしばらくし、月が空の頂点から降りかけていた頃。

浅い眠りを取っていたギラムの耳に、何かの物音を耳にした。

背を預けていたヤシの木からゆっくりと体制を戻し、彼は周囲を見渡した。

すると、彼の居た左後方の草が軽く揺れており、誰かがそこを通った痕跡を残していた。

辺りを見渡し誰が居ないか確認すると、ナヴァルの姿が無かった。

『・・・アイツ、か。』

その場に居ない相手が何処かへ向かったのだろうと思い、ギラムはゆっくりと立ち上がり彼の後を追うように通ったであろう草むらの元へと向かって行った。

その際寝ている3人を起こさない様気を使い、静かに出て行くのだった。

オアシスの草むらを抜け、しばらくして彼はモトゥブの砂漠地帯へと再び足を踏み入れていた。泉周辺に生えていた芝生はそこで途切れており、その先で彼が見つけたのは見覚えのある後姿だった。

日が堕ち月明かりに照らされた砂漠地帯に、たった1人で居る寂しげな存在。それはまるで、マイシップでモトゥブへとやって来たあの時の様な背中であった。太い尻尾は揺れておらず、ただ1人で降り始めた月を眺めていた。

《・・・ギラムか。》

「ああ、悪い。　どこか出て行く姿を見てな、心配になって来たんだ。」

砂漠に1人立っていたナヴァルは後方から気配を感じ、おそらく居るであろう相手の名前を言った。

その言葉に反応して、ギラムは返事を返し彼の事が心配だと告げ付いて来た事を話した。現に今の彼にはこの地で守ってくれていた仲間はおらず、自分達しか仲間と言える存在が居ない。

そんな彼が1人になり何をし出すのか、考えたくもない様子だった。

《心配、か・・・　・・・俺は何時になっても、お前に心配をかけるみたいだな。　あの時の様に・・・》

「・・・あれは事故だ。　お前の取る責任じゃない。」

《だったとしても、不注意で捕まったのは事実だ。　お前を再び、1人にした。　・・・でも、今はお前は1人じゃない。　俺が居なくても、心配はなさそうだけだな。》

「そんな事言うんじゃねえよ・・・　だとしたら、俺はお前の事を護ろうとするわけねえだろ・・・！」

彼の発言を聞き、ナヴァルはゆっくりと身体の向きを変え彼の顔を見ながらそう言った。

だが彼等にはこの地で起こったアリン達の知らない過去があり、何があったのかも覚えていた。だからこそ互いに居たいと思った時が、再び失われようとしている事を呟くしかなかったのだろう。

両者が両者を必要とし、そして互いにこれ以上の無理をかけたくない。

ゆえにどちらかが、行動を取り片方を逃すしか方法が無いのだろう。

ナヴァルの一言にギラムは反論するも、彼の心境が晴れていない事もあり強気に反論はしなかった。

互いに言う事が、苦しいのだ。

《解ってるさ。　・・・悪い。》

「・・・」

そしてナヴァルは再度言葉を継げ、再び身体の向きを変え月夜を見上げた。

風が無く静かな砂漠地帯には晴れ渡った空に浮かぶ月があり、ナヴァルの目には綺麗に映っている様だった。

その後姿を見るギラムも、つられて月を見上げていた。

再びやって来たこの時間も、時期に失われてしまう。

平和に終わらせたいと願っても、そうはさせまいとする存在も居る。

だからこそ、これからの行動を迫られているのだろう。

2人は何も言わず、ただ静かにその時間を満喫していた。

「・・・なあ、ナヴァル。」

《ん。》

「お前・・・俺と居たいか。　それとも、もう一度この場所で野生になって生きるか。」

そんな沈黙を破ったのは、ギラムの一言だった。

この後に何が待っていても、せめて相手の考えを聞きたかったのだろう。

自らが何を望み、そして何をしたいか。　彼は返答を気にしていた。

《・・・　・・・さあな。　お前と居たいと思う気もあるが、今のお前に必要かどうかは解らない。　あの時のお前と違い、今のお前は随分成長した。　だからこそ俺は必要でないのであれば、俺はこの場で果てても良いと思ってる。》

「・・・」

《でも、それはお前が望んでいない事は解ってる。　・・・あんまり、寂しそうな顔をするんじゃないぞ。　お前と共にいる事を望んでいる彼女が、そんな顔のお前と一緒に居たいとは思わないだろうからな。》

問いかけに対しナヴァルはそう答え、これ以上望む事は無い事を告げた。
昔共に居ようと願った相手と離れ、時を越えて再度再開を果たした。

しかしその時とは比べ物にならないくらいの成長を遂げ、自分の居場所が失われた今となっては
戻るつもりもない。

その上、この地の同土達は自分達のために犠牲となりこの世を去った。
これ以上自分が生きていたとしても、はたして何を行えるのか。
彼にはそれが見つからず、自らと相手の考えの中迷っている様だった。

《・・・安心しな。俺はそう簡単に、死ぬつもりは無い。お前が望まない限り、死ぬつもり
は無い。》

「ナヴァル・・・」

《お前は生き続け、そして夢を叶えるんだ。・・・お前のやるべき事は、俺に対してはもう十
分すぎるほど恩を受けた。あの時の礼を、超えてな。》

「でも、俺は・・・俺は、簡単な事しかしていない。現にお前の手当てはベルがや
って、情報を攪乱させたのはフィルとアリンだ。・・・俺は何も、返していない。」

《・・・まったく、お前はそう言うところは頑固だな。ちゃんとは知らないが、お前の親父さ
んとやらにそっくりだ。もう十分すぎるほど、自分で立ってられるのにな。》

しかし1つだけ決まって居る事が彼の中にはあり、それが無くならない限り死ぬつもりは無いと
宣言した。

それが今のギラムに対する最大の返事であり、明確な返事は出来なくとも決まって居る事は告げ
なければならない。

ナヴァルはそれだけは解っている様子で、返したいと思っているであろう恩義も十分返してくれ
ている事を彼に話した。

だがギラムは満足するほど返しては居ないと良い、ほとんどは自分と共にいる友人達がしてくれ
た事だと言った。

自らの手でしていない事を話す彼に対し、ナヴァルは呆れながらもそう言い父親と似ている事を
話すのだった。

そして再びギラムを見つめ、もう1人で居られる事を優しく諭すのだった。

《・・・明日が勝負だ。俺も休むから、お前も少しは休め。》

「あ、ああ・・・・・・ナヴァル。」

《?》

「・・・　・・・もう一度、会えて嬉しかったぜ。　最愛の友人である、お前にな。」

その後会話を終え、再び寢床へと戻ろうとした矢先。

ギラムはナヴァルに声をかけ、彼からもらった言葉に返事をするかのように一言告げた。

ずっと会いたいと思った相手であり、どれだけ時間がかかっても再開を望んでいた事。

そして再び励まされてしまった事に対しての礼を告げ、ギラムは少しだけ笑顔を見せていた。

《・・・俺もだ、ギラム。　若きビーストの、仲間を想いし青年・・・》

彼の笑顔を見た後、ナヴァルもそう言いオアシスへと戻って行った。

互いが互いを必要とし、そして両者にとって大切な結末。

それを思わせる、夜のやり取りだった。

－続く－

オアシスでの夜を終え、再び砂漠地帯に照り付けるかのような日差しが降り注ぐ頃。

ギラム達は野宿をしていたオアシスでの後始末を終え、身支度を済ませたのちその場を出発していた。

彼等の向かう目的地はモトゥブ内で人目に付かず存在し、なおかつ電波が一番届くであろう山脈近くの高台エリア。

西ググ砂漠を通り、しばらく移動した場所にそれはあった。

「・・・ココか？ 主。」

オアシスから出発し、しばしの時間が流れた頃。

先導を歩いていたナヴァルと共に歩いていたフィルスターは、目の前に見つけた洞窟を見て後方に居たギラムに声をかけた。

入口は比較的広く先は見えないものの、周辺の洞窟同様炭鉱に近い物だった。

だがこの先は通り抜けが出来ないとされており、用があって赴く者はおらず人知れず存在する場所だった。

「ああ。 大体この周辺にも俺等と同じで仕事で来る傭兵は居るんだが、この先は基本通り抜けが出来ないからって人気が無いんだ。」

問いかけられたギラムはそう言い、右手にウォンドを召喚し軽く炎属性のテクニックを発動させた。

すると、まるで松明の様に炎は先端に留まり周囲を照らし出した。

同時に光がほとんど差し込まれていなかった洞窟の入口が明るくなり、ほのかに照らし出した。

「行こう。 目的地は、この先にあるんだ。」

「え、でも通り抜けは出来ないはずでは・・・」

「普通なら、な。 大丈夫、俺の案内もだがナヴァルが居る。 普通の傭兵が入ったくらいじゃ、あの場所は見つかりっこないんだ。」

「そうだったんですか。」

そんな彼の行動を目にし疑問に思うアリンであったが、彼からの説明を聞き訳があって通り抜け

が出来ない事を悟った。

ギラムもナヴァルから教えてもらったに等しいが、それでも一目に着く事が無くなおかつ通り抜けが出来ないとされるこの洞窟。

そんな風評もあって今更誰かが来ようとも、来られるわけがないと言うのだった。

一通りの準備を済ませると、ギラムは腕に着けていた端末を弄り電波の状況を確認した。

すると砂漠地帯とは違い微弱ではあるが電波が飛んでおり、連絡を取るにはまだ少し足りないレベルであった。

「・・・やっぱり、ココなら希望があるな。　じゃ、行こうか。」

「はいっ」

電波の状況を確認しログを終えると、彼は再び歩きだしアリン達を洞窟へと導いた。

その先を再びナヴァルが先導し、ギラムの持つ炎の光が届くかどうかの場所を歩いていた。

暗がりでも光を必要としない彼等からしたら、そんなものが無くても先は見えているのであろう。

時々壁際から伸びている鉱石を避けながら、彼は案内を行っていた。

その後彼等は、洞窟内を散策するもこれと言った曲がり道は無くただまっすぐに進んでいた。

そのままではいつしか壁にぶつかってしまうのではないかと心配するアリン達ではあったが、そんな心配は無くいつしか洞窟の先から光が見えて居る事に気が付いた。

「あっ！　光が！」

「付いたな。　うし、後は走るだけだ！」

「ちょっ、待ってって主！！」

光を見つけたウィンドベルの声を聞き、ギラムは持っていたウォンドをしまいナヴァルと共に出口へと向かって走って行ってしまった。

その様子を見たフィルスター達は慌てて後を追うも、足の速い彼に追いつくには出だしが悪かったのだろう。

一足先に外へと出てしまったギラムに続き、彼等も出口へと到着し外へと出た。

すると、そこには意外な光景が広がっていた。

「・・・えっ！　嘘だろ・・・！！」

「凄い・・・」

洞窟を抜けた先に広がっていた光景、それは砂漠地帯特有の茶褐色と黄土色の広がる光景などではなかった。

本来の自然の色である緑が敷き詰められたかの様に見渡す限りの大地に広がる、淡い光を放つ紅色の薔薇達。

軽く吹く風に靡かれ、花卉が周囲に舞っていた。

「主、ココって・・・」

「ここは、ナヴァルの秘密の庭らしいぜ。　高台の一角で、なおかつこんな山脈で日の光しか差し込まない場所にある大地。　マイシップのスピードで走行してても、ココを見つけるには相当視力が良くて注意深く見てないとな。」

「素敵な庭ですね・・・　・・・それに、薔薇が透き通ってる。」

「フォトンを培養とした、特殊な花らしいぜ。　道中が遮られるのも、どうやらフォトンが原因で出口に戻されるって話らしい。　俺が何故通過出来るのかは解らないが、おそらくナヴァルが理由なんだろうなって思うんだ。」

不思議な大地を見たフィルスターにギラムはそう答え、見晴らしが良いにも関わらず見つけれないと言われる場所に解説を加えた。

それには大気中に存在する『フォトン』が原因らしく、薔薇の咲く高台に膨大な量のフォトンが存在する様だ。

それが洞窟内に干渉し、部外者を遠ざけ目視するにも幻影が張られ目視も出来ない。

だからこそ色鮮やかな大地を誰も知らず、ずっとこの台地で咲き続けてきたのだろうと彼は言った。

一時期S E E Dの影響も受けたものの、それでも活性化したフォトンと自然の力が蘇らせた。

と、ナヴァルは補足しながらアリンの元へとやって来た。

彼の口には、一輪の薔薇が咥えられていた。

「ナヴァちゃん・・・」

《ココ、俺とアイツ等の秘密の場所なんだ。　もう知ってるのは俺とギラムだけだったけど、君達はギラムの最愛の友人だ。　紹介させても、俺は文句なんて言うつもりは無い。　・・・ん。

》

「・・・」

啞えながらもナヴァルは話しを続け、アリン達にも知ってもらいたいと想い連れてきた事を言った。

その上電波が良い場所と言えば、彼の中で思い当たる場所がここであり無事に元の世界に戻してあげられる。

そして寂しさを覚える彼女のためにと、励ます思いで薔薇を持ってきたのだ。

そんな彼の配慮を知り、アリンは静かに薔薇を受け取った。

淡い光沢のある薔薇は輝いており、手元の刺は左程気にならない少し変わった物だった。

「ナヴァちゃん、ありがとう。」

《礼は、生きて帰ってからな。》

「フィル、電波はどうだ？」

「ん・・・　・・・すげえ！　さっきまでと違ってビンビンだぞ！？　ココ都市街かよ！？」

「良かった！　これで、この事件も終息・・・」

「そこまでだ！」

そんな彼等の元に、ナヴァルの秘密の庭園入り口として使われている洞窟出口から声がした。そこに立っていたのは、先日彼等を撃ち殺そうとしていた。

《研究員共・・・チッ、就いて来てたのか。》

－続く－

紡ぎ続けた交響曲

ギラム達はその声を聞き振り返ると、そこには先ほどの研究員達が立っていた。
軽く乱した息の様子を見ると、どうやら後を追いかけては来たものの何かの障壁で時間を使っていた様だった。

「ようやく見つけた。・・・さて、貴様等があそこで何をしていたのか、正直に喋ってもらおうか。」

研究員の1人がそう言うと、その場に居た他の研究員達は一斉に手持ちのライフルの銃口をギラム達に向けた。

その行動を見て、アリンは慌てて薔薇を置きナヴァルを抱え上げ、ライフルの銃弾から当たらないよう出口から移動し自分の後ろに隠した。

抱かれたナヴァルは、そのやり取りを静かに聴いていた。

「正直に喋った所で、俺等はどの道蜂の巣確定か。いいだろう。」

対立する相手全員がライフルを撃つ体制に入っていたためか、ギラムは軽く推定した事を話しつつバックを開けた。

そこには先ほどの場所で集めた証拠物品が全て入っており、ナヴァルと自分達の会話を録音したテープも入っていた。

「お前等があの研究施設で行っていた事。それは非合法的な原生生物の体内属性の変換技術だ。」

「数年前のS E E D事変で話題になった侵食事件。それを元に、お前等は他の原生生物達を実験体に行動していた。このナヴァルも、被害者の1人。」

「この情報を公に出せば、今出ている大規模な殲滅ミッションは凍結。貴方達はお縄確定です。大人しく降伏しなさい！」

ギラムがそう言うと、フィルスターとウィンドベルも次々とそう言いだし、相手に降伏するよう命じた。

「・・・へえ。そこまで調べたとはな。だが、俺等がやっていたという事実は」

「証拠なら有ります。」

ギラム達が出た言葉に対して逃げ道を作るように研究員達は言う、不意にアリンはそう言い彼等を見た。

「何・・・？」

無いはずの証拠を言われ、研究員達は驚きつつアリンを見た。

「私の記憶媒体には、あの研究施設が活動していた頃の監視カメラの映像が記録されています。貴方達は愚か、実験体とされていたナヴァちゃんも移っています。もちろん、音声もございます。」

ナヴァルを抱えた状態でアリンはそう言いつつ、再生準備が整ったのか、腕の一部のパーツを開き、目の前に映像を映し出した。そこにはこの場に居る研究員達のやり取りと実験。そして鳴き声をあげる原生生物達が移っていた。もちろん、他の映像にはココに居るナヴァルも写っていた。

「物品の証拠に映像の証拠。これ以上にお前等が犯人じゃないと言う事実は無い。それに、この場には無いがウィンドベルが採取したナヴァルの皮膚の一部もある。それとココにあるサンプルが一致すれば、もう逃げられないぜ。」

「観念しろ！」

完璧な証拠もそろい言い逃れが出来ないと相手に言う、フィルスターがもう一度降伏するよう言った。

「・・・チッ。もはや殺処分意外道は無いみたいだな。覚悟は、出来てるんだろうな？」

言い訳をするのを諦めた相手はそう言う、再びライフルの銃口を5人に向けた。すでにチャージショットを完了させている奴も居るため、回避が難しい状態だった。

「・・・」

その様子を見たギラムはゆっくりと進み、アリンの前に立ちはだかった。
同様にアリンもナヴァルを後方に隠し、ウィンドベルとフィルスターは手にガードが出来る武器を装着した。
そんな4人の行動を、ナヴァルは抱えられた状態で見つめていた。

自分のために盾になっている。

抵抗するのが、目に見えていた。

「死ねっ！！」
「ッ！」

敵はそう言い放ち、ライフルの発砲する音が聞こえる前に、アリンは目を瞑った。

《待ってくれ！！》

ライフルを発砲しようとした研究員達に向かって、ナヴァルは大声で言った。
すると、撃とうとした一部の研究員達は驚き、撃つべき方向を間違え、ギラムの横を過ぎた。
アリンはその声の主を見て驚く中、ナヴァルは必死にアリンの腕の中から脱出し、ギラム達の前に立ちはだかった。

《俺が居るから、ギラム達が犠牲になるんだ。死ぬのは俺1人で十分だ！》
「！ 駄目ですナヴァちゃん！ そんな事しても！」

翻訳機から出る言語を聞き、アリンは慌てて3人の後ろか前へと飛び出した。
その行動を見て、フィルスターとウィンドベルが慌てて手を引いた。

「アリンさん駄目です！ 前に出たら！」
「でもっ・・・！！ ナヴァちゃんがっ！」

行動を静止させようとするウィンドベルに対して、アリンは必死にそう言った。

《もういいんだ・・・ アリン。》

「・・・」

すると、前にいたナヴァルがそう言い、アリンの居る方へと顔を向けた。

《俺はこの数日、生きられただけでも十分嬉しかった。・・・もう、俺のために犠牲者になる存在達を見たく無いんだ。》

「ナヴァちゃん・・・」
《お願いだ。 俺の信頼するギラムと一緒に、最後を見届けてくれ。》

ナヴァルの言った言葉に対して、アリンは涙を流した。

「本当にいいのか、ナヴァル。」
《ああ。 もう一度、お前に会えて嬉しかった。 この場所で朽ちるなら、本望だ。》

アリンが涙を流す中ギラムはそう問いかけると、ナヴァルは頷くようにそう言った。
そんな最後の言葉を言うかのように言うナヴァルに対して、フィルスターとウィンドベルも静かに見守るしかなかった。
彼の真意を知り、引きとめようとするだけ無駄だと悟ったのだ。

《ウィンドベルとフィルスターにも、会えてよかった。 俺の大切な友人達を、どうか。 守ってくれ。》
「・・・ああ。」
「お約束・・・ します。」

軽く涙目になりつつも、2人はナヴァルに言った。

4人に自分の最後だと思われる言葉を言うと、ナヴァルは静かに前に進み、ライフルの集中砲火を浴びやすい位置で立ち止まった。

《約束しろ。俺は殺処分を受けるが、俺の大切な友人達に手を出さないと。》
「いい心がけだな。」

・・・放て！」

パパパンッ！！

ナヴァルが研究員達に向かって行った言葉に対する返答が無いまま、ナヴァルはその場でライフルから撃たれる銃弾の餌食となった。

《グワァアッ！！》
「ナヴァちゃん！！」

そんな最後の生き様を見て、アリンは涙を流したまま叫んだ。

ライフルからの銃弾の嵐が止み、アリンは慌てて撃たれたナヴァルの元へと走った。

《・・・》
「ナヴァちゃん！　しっかり！」

瀕死の状態となっており、息が絶え絶えのナヴァルに向かって、アリンは叫んだ。
だが今の彼は立ち上がる所か目を開ける体力も無いためか、何も言わなかった。

《ア・・・リン・・・　・・・ゴメン・・・》
「・・・！」

そんなナヴァルを見ていると、最後の力を振り絞ったのか、ナヴァルのつけている翻訳機が喋った。

《でも・・・もう・・・ 涙・・・流さないで・・・くれ・・・ ・・・お願いだ・・・》
「ナヴァちゃん・・・」

アリンがそう呟くと、ナヴァルは頑張って片目を開けた。
だが今の彼の目には光が薄くなっており、もう長くは無いと思われた。

《・・・ギラ・ム・・・ 夢・・・叶・・・えろ・・・よ・・・》

そんなナヴァルの言った言葉に対して、ギラムは静かに頷き、彼の最後を見守った。
敵も追い討ちをする気が無かったのか、最後の生き様を見届けていた。

《・・・ ありがとう・・・》

パサッ・・・

「！！」

体力が底を尽きたのか、ナヴァルは上げていた顔をそのまま地面に下ろし、段々と霧状になり出した。

アリンはそんなナヴァルを見て、その場に呆然と涙を流した状態で座る事しか出来なかった。
そして、彼が完全にその場が消えてしまうと、アリンは悔しそうな顔をしつつ、叫んだ。

「ナヴァちゃああああああーん！！」

そう叫ぶと、アリンは両手を顔の前に持って行き、泣き出してしまった。

「フッ。 時間がかかったが、コレで終わりだ。 ・・・さあ、お前等も藻屑と化させてやる。
」

目標固体が消えた事を確認すると、研究員達は下げていたライフルを再び上げ、ギラム達に向けた。
だした。

ジャキンッ

「・・・！ 貴様等ああ！」

その動作を見て、約束を守らない様子を見せた事に腹が立ったのか、フィルスターは持っていたライフルに加えてショットガンを装備し、掟破りのダブルアクションを取る体制になった。ウィンドベルも同様にロッドを握り締め、その場に残され涙を流す主人を守るため、強力なテクニックを放つ体制に入っていた。

「俺の・・・ 友人を！」

同様にギラムも怒りを覚え、本気と言わんばかりにナックルを構えた。アリンは依然として座ったまま、涙を流していた。

「覚悟・・・！」

「そこまでよ！」

「！」

ライフルを撃とうとしていた研究員達は、背後からした声に驚き、後方へと振り返った。するとそこには、緑色のセミロングヘアーの女性と、茶の髪と皮膚をした男性が立っていた。

「ウルスラ！」

「クラウチ！！」

なんとそこに立っていたのは、元リトルウィング社長のウルスラと、その夫クラウチだったのだ。
いつも通りのクラウチとウルスラの手には、それぞれ武器が握られていた。

「貴方達。 この事件の黒幕だという事は判明しているわ、大人しくしなさい。」

静かに数歩前に出つつ、ウルスラは敵に降参するよう命じた。

「何を」

「遅い！！」

パシンッ！

だが反抗する動作を見せた途端、ウルスラはそう言いつつ持っていたフォトンウィップで敵の持っていたライフルを弾き落とした。

そしてそのままもう1回転して、続けざまに敵をなぎ払った。

その攻撃には絶えられず、敵はその場からはじき出され、地面に倒れた。

「私の可愛い社員達に手を出した挙句、女の子に涙を流させながらまだ懲りないようね！」

「ッ・・・」

「お前等、どの道もう逃げ場は無いぜ。 大人しくしとけ。」

ウルスラが珍しく激怒する中、クラウチが止めと言うより、降参しやすいようと、そう言った。

そしてその後、駆けつけてきた警察達に身柄を拘束され、今回の事件の黒幕は全員お縄となった。

「・・・ナヴァちゃあん・・・」

敵がその場から居なくなったものの、未だに涙を流すアリンの元に、ウルスラは優しく歩み寄った。

「貴方、大丈夫。」

「ウルスラさん・・・ お友達が・・・ ギラムさんの友人が・・・」

ウルスラの声を聞き顔を上げつつ、アリンは涙を流しつつそう言った。

だが声の調子がよくない様で、声が震えていた。

「とりあえず、涙を拭きなさい。 顔を汚しちゃ、勿体無いわ。」

「・・・はい。」

そんなアリンを見て、ウルスラは持っていたハンカチを差し出し、優しく顔を拭いた。
相手がキャストという事もあったか、顔に傷が付かないよう気を使っていた。

「ウルスラ。 どうしてココが。」

そんな2人の元に、ギラムは少し気を使いつつそばにやってきた。
後ろにはフィルスターとウィンドベルもあり、コチラも不思議そうだった。

「貴方達の居場所を、エミリアに頼んで突き止めてもらったの。 その後、マイシップからの通信が途絶えたから、何かあったと思ってきたら、案の定って訳。」

「エミリアが。」

ギラムからの問いかけにそう答えると、ウルスラはハンカチをアリンに手渡し、自分で拭くように言った。
その声のアリンは静かに頷き、目元を拭いた。

「お前等の持ってる端末から音声が聞けたから、コチラにも情報は回ってるぜ。 参加しなかった理由も、大体想定が付いた。」

その場の後始末が済んだのか、クラウチもその場にやってきて、そう言った。

「先に話が回っちまったわけか。 . . . でも、アイツを助けられなかった . . . 」
「それが、アイツの意思だったんだろ。 仕方がないさ。」
「 . . . ああ。」

クラウチに軽く説明し返答が帰ってくると、ギラムは静かにナヴァルが最後に居た場所へと向かった。
するとそこには、自分がナヴァルにつけた翻訳機が落ちており、近くには赤い薔薇が落ちていた。
騒動の際アリンが落としたものだろうと彼は判断すると、後方に立っているであろう上司に声をかけた。

「クラウチ。 ココの事は、皆には内緒にしておいてくれ。 アイツの花園を、多くの人には知ってほしく無いんだ。」

そんな薔薇を見つつ、ギラムは言った。

「ああ、解った。 約束するぜ。」

「感謝するぜ。」

クラウドからの返答を聞くと、ギラムは丁寧にその場に落ちていた薔薇を拾った。

『アイツの意思・・・俺は聞き届けたぜ、ナヴァル。』

ギラムは心の中でそう呟くと、翻訳機と薔薇を手にし、アリンの元へと向かった。

「アリン。」

「・・・ギラムさん。」

アリンの元へと行ったギラムは声をかけると、ゆっくりとアリンは顔を上げた。
まだ少し顔が赤いものの、涙は無くなった様子だった。

「コレ。 アイツが最後に居たこの花園の薔薇だ。 受け取ってくれ。」

「・・・」

ギラムはそう言いつつ、持っていた薔薇をアリンに差し出した。

そんな薔薇をアリンは受け取ると、静かに花を見た。

薄く光沢のある赤い薔薇は、普通の薔薇とは違う生活環境で咲いていた事を示していた。

トゲの部分に気をつけつつ、アリンは薔薇を優しく抱きしめた。

「ナヴァちゃんの、花・・・」

「ココはアイツの大切な場所。 その花がある限り、アリンは何時でもナヴァルと一緒にだ。」

「・・・はい。」

ギラムにそう言われ少し元気が出てきたのか、アリンはゆっくりと立ち上がり、顔を上げた。

「ギラムさん、ウルスラさん。　ありがとう・・・」

薔薇を手に持ったまま、アリンは2人に礼を言った。

「礼なら要らないわ。　私はやるべき事を、やっただけよ。」

「俺もだ。　守れなかった事は悔しいが、アイツと最後を見送ってくれて、感謝してる。」

礼を言われた2人はそう言いつつ、アリンの持つ薔薇を見た。

同様にクラウチとフィルスターとウィンドベルも、アリンの持つ薔薇を見た。

「ナヴァちゃん。　何時までも、私達を見守っていて下さいね・・・」

アリンが静かにそう言うと、薔薇は少し輝いたように見えた。

そしてしばらくアリンが薔薇を見た後、その場に居た全員はリトルウィングへと向かって引き返して行った。

－E P I S O D E E N D－